

「美術館の制度と展示」 研究会と調査活動

仲間 裕子*

「美術館の制度と展示」(2000年度産業社会学会研究助成)研究会の発端となったのは I.Karp and S.D. Lavine, ed., *Exhibiting Cultures: The Poetics and Politics of Museum Display*, Smithsonian Institution, 1991をテキストとしてとりあげた社会学研究科の講義である。他研究科所属の2人を含む13人の院生とさまざまな意見・批評を交換する過程のなかから、それぞれの専門領域に引き付けた新たな調査を進めたいという要求が生まれた。そこで大久保恭子・田中不二夫両氏に参加していただき、2000年・2001年度に研究会を開催し、発表と討論の場を設けた。美術館学の研究はすでに内外で多くの成果をあげ、理論的なベースが築かれているが、とくに個々の美術館を対象にした具体的な調査や分析はいまだ限られている。美術館の展示企画者 美術作品(作者) 鑑賞者という三者の立場をそれぞれ重視し、また社会的受容の問題をも考察の対象に含めながら、従来の美術館学の枠にとられない、自由な論点の展開を試みた。

今回の執筆論文は近代の国家戦略として美術館の制度/展示、およびそのアンチテーゼである作家側の戦略としてのシュルレアリスムの展示形式に注目している。ドナルド・プレツィオージは「美術は、要約すると、歴史主義や本質主義のまさに中心的な装置としての役割を担うようになり、西洋ヘゲモニーのエスペラント語であった。世界の西洋化のために、ミュージオロジーとミュージオグラフィーを含むスペクタクルと展示の文化が不可欠となったことは容易に理解できる」¹⁾とした。したがって美術館という制度は西洋ヘゲモニーの図式化のもとに、ミュージオロジーとミュージオグラフィーを方法論として解釈可能になるだろう。

ドイツの現代アーティスト、トーマス・シュトルートは写真作品の《ルーブル美術館》(図1)と《サン・ザッカリア教会》(図2)によって、こうした美術館の本質を暗示している。ミュージオロジー(美術館学)の立場から言えば、かつて教会という真正・神聖な場にあった美術作品をそのシミュレーションともいえる美術館で展示する“置換”の行為は、戦争、略奪による場合はいうまでもなく、必然的に真正の場に存在しないという“不在”の意識を呼び起こすのである。このため、固有の歴史的文化的コンテクストから切り離された<もの>に対する再度の意味付与がミュージオグラフィー、つまり美術史、美術批評、鑑定学の役割となる。今なお輝かしいルーブル美術館の存在は、このような西洋美術史の勝利の証しに他ならない。

* 立命館大学産業社会学部教授



図1 シュトルート《ルーブル美術館》1989年



図2 シュトルート《サン・ザッカリア教会》1995年

ただし美術館が「西洋ヘゲモニー」の装置と捉えられるにしても、その際西洋はフランスを中心にしている。したがって“西洋”美術史の欠如するアメリカとドイツにおいてはそれに対抗したアイデンティティの摸索が焦点となるはずである。大久保氏の「ニューヨーク近代美術館（MOMA）と20世紀美術」、田中氏の「古典的ハリウッド映画の中の美術と美術館 プリミティヴィズムの馴致」、および仲間の「ベルリン、ナショナル・ギャラリー ナショナリズムとフリードリヒの受容」の研究が明らかにするのは、近代の国民国家的イデオロギーの内に美術館の制度が取り込まれて行きながら、結局はルーブル美術館の体現するヘゲモニーのルール深化・拡大の“術”に終始するプロセスである。大久保・田中論文のキーワードとなるプリミティヴィズムの導入はアメリカ型の、ドイツ帝国のロマン主義の再活用はドイツ型のそのための手段であった。こうした美術館の政治性に対して、「シュルレアリスム国際展（パリ、1938年） 展示方法に見る芸術運動の在り方」（浅川朋美）は、作家が企画者でもあるこの展示のもつ独自性、つまり展示そのものが芸術作品となる可能性に注目し、新しい展示形式とその受容にわれわれの関心を促す。美術展示が美的機能と同時にメディア的機能、つまりそのメッセージ性をもつことを重視したこの展覧会は、ファシスト政権へのひとつの“警告”としての捉えることも可能なのである。

研究会のメンバーで元社会学研究科院生の成果は以下の課題ですすでに発表されている。「新しい美術館の形」（板井由紀）、「ベルリン絵画館の現在」（三木いずみ）、「テイト・ギャラリー再編が生み出したナショナリズム」（奥田素子）、「福岡アジア美術館 交流型美術館の可能性」（竹下暁子）、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2000の報告」（野崎るみ花）、「横浜トリエンナーレ2001のスクールプログラム」（内藤紫都）（『マルチメディア時代に対応した総合芸術のファカルティディベロップメント研究』、代表：遠藤保子、科学研究費補助金研究成果報告書、2002年）。

本研究会では美術館の視察を可能な限り実施し、ナショナル・ギャラリー（ベルリン）、ベルリン絵画館、芸術メディア・センター（カールスルーエ）、テイト・ギャラリー（ロンドン）、福岡アジア美術館、横浜トリエンナーレ、越後妻有アート・トリエンナーレ他の見学/インタビューの調査をおこなった。お世話になった方々にこの紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

注

1) Donald Preziosi, “The Art of Art History”, in: *The Art of Art History: A Critical Anthology*, Oxford, New York, 1998, p513.

出典(図1, 2): Heiner Bastian, hrg., *Sammlung Marx*, Hamburger Bahnhof, Museum für Gegenwart-Berlin, 1996.